

知られざる米中関係の解明

松尾文夫著
アメリカと中国



四六判 368頁
岩波書店
[本体 3,000円+税]

井川 義次

まず著者の松尾文夫氏について紹介したい。一九三三年東京生まれ、中国育ち。東京、福井で米軍の空襲にあっている。奇しき米中との出会いが本書執筆の原点となっている。その後、学習院大学卒業、一九五六年、共同通信社入社。六四年以降、ニューヨーク特派員、ワシントン特派員、のちバンコク支局長、八一年、ワシントン支局長。主にアメリカで取材。共同通信マーケット社長などを歴任。二〇〇二年五月からフリージャーナリストとして活動を再開。二〇一七年五月には日本記者クラブ賞を受賞している。事実の裏づけを軽やかなフットワークで稼ぎ、専門研究に立脚する松尾は、これまでいくつもの世界的出来事の実現を予言している。たとえば、一九七二年には、日本の頭越しのニクソン訪中による米中の電撃的な和解を的中させ、戦争当事国の首脳同士の戦争犠牲

者に対する慰霊鎮魂を提唱した『オバマ大統領がヒロシマに献花する日』（二〇〇九年）出版七年後の二〇一六年になって、オバマ大統領の広島献花、安倍首相のポール・ハーバー献花によって本当に実現したことがその雄弁な実例である。

これらのことはある特定の時代の雰囲気、スローガンや公式見解を表層的に信じる姿勢とは対蹠的な、実証的分析なくしては語らないという哲学・方法論に裏打ちされたものであることの結果である。松尾の提言に対して虚心に耳を傾けなければならぬ理由はそこにある。

表面的には対立し合っているかに見えた中国共産党に対して、中国人の「再起」として認めた一九四九年刊のアメリカ国務省の『中国白書』を精読するよう進められた松尾は通読した結果から、アメリカのすさまじい現実主義を痛感して、

米中間の接触を一から精査しようと決意したことが本書執筆の遠因である（エビログ）——日本国政府は本白書を松尾ほど真摯に検討して中国政策をとってきたのだろうか？

識者の間でおぼろげながら知られていても、決して明確な輪郭線を描かず、点と点との関係しか見えなかつた米中関係を、松尾は立体的に浮かび上がらせることに成功したのだ。そこにはほとんど未知でありながら興味深い逸話にあふれている。

まず前史として知らなければならぬのはアメリカ合衆国建国の父たちと中国ならびにその哲学情報の取得に関する経緯である。アメリカ独立の理念の背景には、当代ヨーロッパにおける人間に平等な理性の尊重と、その能力にもとづく理想社会の構築を目指す啓蒙主義思想があつた。ただしこうした理性重視に基づく啓蒙の理念構築の過程に、「神」なき人間の理性的本性（「性」）による理想社会の実現を説く儒教思想の流入が後押ししていた——本件については世界的に見ても非常に古きに遡る第二次大戦以前の日本における研究の蓄積が存在しているが、悲しいことに現状では知る者はごく少数である。中国の政治・経済・宗教・文化・地理・天文・哲学思想等に関する万般の情報のヨーロッパへの流入には東方布教を志すキリスト教、イエズス会宣教師が関係していた（第二章）。彼らは布教対象国の情報を得ることで宣教の便

をはかろうとしたのだが、これらの情報——そこには宋明理学によって人間性重視と世界の合理性が前面に押し出された儒教理念も含まれる——は、他方で中国に対する関心とアローチを誘発した。アメリカ建国の父の一人フランクリンはルイ・四世が出版を助成した『中国の哲学者孔子』（二六八七年）掲載の朱熹編・張居正注「四書」ラテン語訳中の『大学』の英訳文を一七三七年の『ペンシルベニア・ガゼット』紙に掲載した。さらに「中国狂」として知られるフランスのヴォルテールと交流し、またイエズス会士デュ・アルド『中華帝國全誌』——モンテスキューやヘーゲルも読んでいる——からの中国情報を得て産業物産についての発言等を雑誌で公にしていた。同じく第三代大統領ジェファソンはフランクリンとともに重農主義者ケネーを通じてパリで儒教思想に接し、科挙試験にも似た教育制度を構想したり、また元代の雑劇『趙氏孤児』等にも目を通していた（こうした異文化に対する一定の敬意をもった考察をふりかえるとき、最近の表層的な儒教批判書がいかにも底が浅いものか分かる。この手の感想文がベストセラーになるような人文軽視による地にまで墮ちた日本の歴史音痴のていたらくには目も当てられない）。フランクリン、ワシントン、ジェファソンとともに、——フランスと連携しつつ——アメリカを英国からの独立戦争で勝利に導いた実業家・財務長

官口バート・モリスは、近代資本主義とナショナリズムを確立する方途を模索する（第一章）。彼は一七七六年のアメリカ独立宣言・建国から間もない一七八四年、商船「エンプレス・オブ・チャイナ」をニューヨークから広東に送り出す（第三章）。米中関係はペリーの日本来航より六九年も以前に開始していたのだ。主な商品は意外にも、アメリカにも自生する朝鮮人参であった。これは在華イェズ会士の情報から中国において朝鮮人参が高価であることをリサーチした結果である。収益は投資額の二五パーセントを上回り、中国の貿易への期待は上昇し続ける。

このようにアメリカは実利面で中国との関係に期待を持ったが、他方一九世紀このかた、中国に対して「二つの顔」をのぞかせてきた。具体的には、イギリスのアヘン貿易を批判する理想主義的側面と、一八五八年の天津条約に見られるような、列強が獲得した特権・利益をちゃっかり享受するといった実利主義の側面とである。清の林則徐は一八三九年に、広東の虎門においてイギリス船の密輸アヘン二万箱を焼却する（第四章）。アヘンの廃棄を支持したアメリカのプロテスタント宣教師ブリッジマンは、その場に立ち会っていた。清王朝がこうした姿勢を好意的に見たことから、アメリカは政府からの信頼を獲得することとなる。またブリッジマンはアメリカ

カの地理、歴史、政治などに関する諸情報を、漢文で著した。これはのちに当時の世界の情勢を網羅した『海国図志』に編入された。『海国図志』は一八四七年に中国で出版されるや、幕末の日本にも伝えられ、横井小楠、松平春嶽、吉田松陰、高杉晋作等、新生日本構築の原動力ともなるものであった。

アメリカの理想主義的な一面は一九〇〇年の「義和団の乱」平定後、賠償金二七九二万ドルをアメリカに留学する中国人の費用に充当したことがあげられる（第七章）。この時、留学生のための英語の予備校が習近平や胡錦濤を輩出した名門、清華大学の起源となった。またアメリカは、宣教師の布教を支援した。その中には中国の最高学府、北京大学の前身の燕京大学もあった。さらにアメリカは大量の留学生を受け入れ、中国人に対する友好的な姿勢を示してきた。こうした姿勢はアメリカの「道徳外交」の勝利とも評されている。

また評者にとっても驚きであったのは、湖南省にいた頃の若き毛沢東がアメリカの設立した教育機関（アメリカのエル大学の「中国エール協会」）について認識しアメリカに深く傾倒していたということである。その内実をこれほどはつきりさせたのは本格的なかたちとしては日本では本書が初めてではないかと思われる。松尾は、毛沢東とアメリカとの「赤い糸」に注意を向けさせる（第七章・第八章）。毛沢東は、アメ

リカに留学した胡適を通じて哲学者ジョン・デューイのプラグマティズムを知り、これに共鳴していた。のちにはジャーナリストのエドガー・スノーを延安で歓待し彼を通じて中国共産党の正統性を海外に向けて発信するなどしている。松尾は、毛沢東思想にながれるプラグマティズムの影響について考察すべきだと主張する。彼は豊かな先行研究の読破と現地調査から、毛沢東の「実事求是」の根底には故郷湖南の社会統治に「実学」を用いる独特の文化、思想があり、これにアメリカの合理思想、実用主義が流入・融合した可能性があったと説く。こうした史実から米中関係は対立しているようでも、相互理解・妥協できるのかもしれないとの見込みを松尾は示す。現代中国成立の初期の段階にアメリカ受容の態勢が存在していたのだ。

他方アメリカの対中政策のリアリズムはつぎのことにも現れている。太平洋戦争期には蒋介石政権に対する支援・協力関係を保つかと思わせて、民衆の支持のなさや、指揮系統の貧弱さを察知するや、あっさり見切りをつけ（第九章・第一章）、また冷戦時代には徹底した反共政策を掲げて対立したにもかかわらず、ニクソン大統領が国交正常化のために訪中するなど、臨機応変に歩み寄りを見せるなどした事実である——日本の頭越しに。米中は水面下でしっかりと結びついでい

たのである。米中間にはしたたかな「共生」の原理が働いており、日米関係より遥かに長く深い裏づけがあった。事実として米中は朝鮮戦争の三年間を除き、一三〇年以上もの間、交戦したことはなかった。

日本人は海を隔てた両隣人について、熟知していると信じてきただろうし今も信じていよう。しかしその思い込みを打ち破るのがこの『アメリカと中国』である。松尾のこの成果はいうまでもなく長年にわたる足で稼いだ実地のリサーチに深く根ざしている。さらには本書は、日本における基礎研究の蓄積にしっかりと立脚している。その事実すら知らないのは日本人として恥ずべきことである。昨今の人文学軽視は、情報を読み誤った過去の失敗同様日本に惨めな結果をもたらし、ひいては「国益」を損うことにつながるだろう。その意味でも本書は広範な視界と地道な資料の読解が重要であることを痛感させる実証研究であると声を大にして言いたい。

なお本書は、韓国や中国本国でも話題となっており、まもなく韓国語での翻訳出版がなされると言う。また高い蓋然性で中国語の翻訳出版が見込まれることを付言したい。

（いがわ・よしつぐ 筑波大学）